

ひろちゃん、メキシコへ行く

～ プエルト・バイアルタ ～

Mexico — Puerto Vallarta

Vol 1



大橋 ひろこ 著

メキシコへの誘い



IMAGE from <http://images.ask.com>

メキシコへの誘い

「メキシコ、行かない？」

友人から誘いを受けた。

メキシコといえば、ずいぶん昔にカリフォルニアとの国境にあるティオワナという町へ立ち寄ったことがある。薄汚れた、雑然とした町だった。町のいたるところに、食堂がある。地元の食事がどんなものか食べてみたくて、あちこちのぞいては見たのだが、汚れたなべ、油や得体のしれない染み付いたカウンターなどが気になってしまい、臆病な私は怖くて手がだせなかった。しかし、どうやら食べなくて正解だったようだ。後で知ったことだが、その地域のバクテリアに体が順応していない外国人は、地元で売られている生野菜や生水で簡単にお腹を壊してしまうらしい。免疫の無い私などは、いちころにやられていたかもしれない。

国境の町というのは、どこも「独特」と聞いていたので、「普通」のメキシコの町や村を見てみたくて、ティオワナを後に、国道をそのまま車で南下してみたのだが、いくら走っても、国道沿いに集落は見当たらなかった。たまに崩れかけたバラックのような小屋らしきものを見かけるくらいで、野原や丘がつづく。1時間近く走り続けたらどうか、見知らぬ土地に少し不安になってきたころ、海岸ぞいにホテルのようなものを発見、そこで食事をとることにした。ホテルのレストランのメニューは、メキシコ料理というよりも、アメリカの一般的なメニューと似通ったもので、適当に頼ん

で食べてみたが、さして感動もなかった。まあ、こんなものかな、と、それ以上メキシコを追求することなく、その日はそのままアメリカへ引き返した。

それ以来、メキシコのことはほとんど忘れ去っていたのだが、数年前に、メキシコ訪問を再び見直す機会があった。それは、ハワイへ行った時に、たまたま出合ったアメリカ人女性との会話がきっかけだった。この日は、ハワイの真珠湾の博物館に入るため、入場口で並んで待っていたのだが、前に並んでいる50才くらいの、少し小太りで人のよさそうな女性が、暇つぶしに声をかけてきた。ハワイに数日間ほど遊びにきているのだという。当たりさわりの無い世間話をしばらくした後、ハワイ以外ではどこのバケーションが楽しいかという話題になった。すると、彼女は目を輝かせながら、「もちろん、メキシコよ。私、毎年1週間は、メキシコのリゾートに行くことにしてるの。食事込みの旅行パックがすごく安いのに、その食事といったら、ものすごく豪華で美味しいのよ。」と力説する。「どの町のリゾート？」と尋ねてみると、毎年行っているのは、プエルトバイアルタ (Puerto Vallarta) だという。しきりに勧めるので、旅行会社はどこを利用しているのか聞いてみると、インターネットの Apple Vacations や、FunJet.com などを利用するのだという。この日の彼女との会話が印象的で、「一度、メキシコのリゾートへ行ってみなくちゃ」という願望が、心の中に芽生えた。

それからあっという間に数年がすぎ、今回の友達からのメキシコ旅行の誘いだった。

アメリカやメキシコのホテルには、一人部屋よりも、カップルで泊まれるように設定されている部屋が圧倒的に多い。その上、日本と違い、一部屋いくらの価格で支払うので、一人泊まろうが、二人泊まろうが、ホテル代はほとんど変わらない。なので、バケーションなら、一人で行くよりも、友達で行ったほうが、宿泊代が安くつくことになる。また、メキシコのように治安がそれほど良くないといわれる地域では、特に女性の場合は2人以上で行動した方が安全ともいえる。私にとって、この友達からの誘いは、非常に魅力的だった。

友達はメキシコならどの町でもかまわないと言う。とりあえず、いろいろな人の意見を参考に、価格と相談しながら決めるのがいいだろう、ということになった。だめもとで、周りの友達に声をかけてみると、これが、皆さん、結構頻繁にメキシコの各地に遊びに行っていたことが発覚した。カンクーン (Cancun)、オハカ (Oaxaca)、カボ・サン・ルカス (Cabo San Lucas)、プエルト・バイアルタ (Puerto Vallarta) など、代表的な観光地名がどんどんあがる。クルーズ船でいろいろな町を周遊するのが好きという人もいた。

季節は秋、9月。メキシコ湾は、12月まではハリケーンシーズンといわれている。せっかくのバケーションをハリケーンで台無しになるのを稀有して、カリビアン側は避け、太平洋側の町に絞ることにした。その中で、ダントツの人気だったのが、なんと、ハワイの女性も勧めてくれたプエルト・バイアルタ (Puerto Vallarta) だった。

どうやら、プエルト・バイアルタは、カナダ人とアメリカ人にとっても人気の観光地らしい。そのため英語を話す人が多く、現地でも会話に困らないという。さらに、それほどのリゾート観光地でありながら、初めから観光地として開発されたためメキシコらしさが全く無いといわれるカリビアンのカンクーンなどとは違い、メキシコ住民の普段の生活や文化にも触れることができるのだという。とても魅力的な町のように思えた。

早速、ハワイで出会った女性が使用しているという AppleVacations.com を含め、その他のウェブサイトや地域の旅行会社などで、価格を調べてみた。その結果、プエルト・バイアルタは、他の観光地に比べてダントツに安く、AppleVacations.com は特に格安のパッケージを提供しているようだった。ホテルの顧客満足度も考慮しながらいろいろ検討した結果、11月半ばごろの1週間で、シアトルからプエルト・バイアルタ直行便の往復飛行機代+7泊8日のホテル代+空港ホテル間の送迎込みで一人495ドル(約3万8千円)というのが気に入った。ホテルは、海岸沿いのホテルゾーン内にあり、ロケーションとしても不便はなさそうだ。1日3食、8日間の食事込み (All Inclusive) にしたい場合は、100ドル(約7800円) 追加とあるが、せっかく外国に行くのだから、食事は、地元のレストランで地域の料理を楽しみたいと思い、食事オプションは入れずに予約をした。

アラスカン航空 (Alaskan Air)。

11月14日 (月) 9:00AM シアトル発、3:35PM プエルトバイアルタ着、

帰りは1週間後の 11月21日 (月) 4:35PM プエルトバイアルタ発、7:34PM シアトル着。

宿泊ホテルはハシエンダホテル (Hacienda Hotel and Spa)。

最終価格は、税込みで一人 US\$600.85ドル (約47,000円)。

出発準備

せっかくの海外旅行だ。かさばるお土産も買うかもしれないし、なんて考えながら、うきうきと、少し大きめのスーツケースに荷物を詰め込んだ。アメリカ国内便の場合は、大抵の場合、荷物を預けると追加料金をとられるのだが、国際便では、1つもしくは2つまで、無料で荷物を預けられるはずである。せっかくなので、大きめのスーツケースに全部ほりこみ、手荷物を少なくして、身軽に旅行するのが楽である。

ところが、この考えが、あまかった。

出発の前日、一応、確認のためアラスカン航空に電話をしてみると、なんと、プエルタ・バイアルタの場合は、スーツケースを預けると、片道20ドル（約1500円）の追加料金がかかるのだという。「は？」である。何かの間違いではないかと思い、念のため調べなおしてもらったが、やはり、「プエルタ・バイアルタは例外」だという。買うかどうか分からないお土産のために、往復40ドル払うのもしゃくにさわるので、出発の前夜、あわてて機内持ち込み用小型サイズのスーツケースに荷物をつめなおした。

11月14日（月曜日）、メキシコへ

私の住まいは、ワシントン州のベリングハムという海辺の町だ。ワシントン州といえば、シアトル・マリナーズの一塁選手の活躍のおかげで、日本人にも馴染み深い州になった。ベリングハムは、このシアトルから車で北に90分ほどの場所にある。さらに車で20分ほど北に走ればカナダの国境だ。カナダのバンクーバーへは、90分ほどで着く。つまり、ベリングハムはシアトルとバンクーバーの中間地点にある町なのだ。日本の千葉県館山市と姉妹都市で、地形・環境もこの館山市と似ているらしい。

メキシコへの出発同日、眠たい目をこすりながら、暗闇の中、ベリングハムを朝の5時に出発した。実は、シアトル空港というのは、シアトル市にあるわけではない。正確には、シアトル市（Seattle）とタコマ市（Tacoma）の間にあり、正式な名前は、各市の名前を取ってシータック空港（Sea-Tac Airport）という。要するに、シアトル空港は、シアトルよりも南方にあり、ベリングハムからは車で2時間もかかるのだ。

国際便は2時間前にチェックインする必要があるため、ベリングハムを朝早く5時に出発したというわけだ。

さて、ここで問題となるのは、旅行期間中、車をどこに駐車しておくかなのだが、シアトル空港内の駐車場は非常に高く、8日間駐車すると、約160ドル（約12400円）ほどとられる。それよりも、空港の周りに点在する民間経営の駐車場のほうが、安くて便利だ。これらの駐車場からは、空港までの無料送迎バスがひっきりなしに出ているため、空港内の駐車場にとめるのと、便宜さはさほど変わらない。今回は、トリプルA（AAA）のメンバーシップのきく AjaxRus という駐車場を利用することにした。8日間で税込み\$68.40ドルだ。

シアトル空港

駐車場から送迎バスに乗って空港に着いたのは、予定通り午前7時すぎだった。

キオスクの機械でチェックイン、セキュリティを通過してゲートに向かう。機内での食事は有料なので、乗る前に腹ごしらえをしておこうと思う。ゲート近くにあるレストランやフードコートを見てまわる。日本の飛行場には、かなり美味しいレストランや有名な店も入店しているが、アメリカの飛行場の食べ物は、高い上に貧弱なものが多い。とりあえず手軽な所で、バーガーキング（Burger King）のハム卵のサンドイッチを購入。搭乗までには、十分時間があるので、友達のネットブックでいろいろ作業をしながら、ゆっくりと朝食をとる。

しばらくして、心と時計を見ると、すでに8時30分だ。出発30分前。ひょっとしたら搭乗が始まっているかとも思い、あわててゲートに行ってみると、なんと、ゲートのまわりはがらんとしていて、乗客が一人も見当たらないではないか！一瞬、まさか、と、ヒヤッとしたが、飛行機はまだ出ていなかった。搭乗口の係りのお姉さんに、「あなたたちが最後の搭乗者よ」と言われ、ひんしゆくをかってしまった。

シアトルとメキシコでは、時差が2時間ある。

約4時間半の飛行時間。

機内でなんだかんだとおしゃべりをしていたら、あっという間に、メキシコに着いてしまった。

1日目（月曜日）、プエルト・バイアルタ到着



www.mapgraphics.com より

飛行機から降りると、いきなり蒸し暑い熱気に体がつつまれた。
先ほどまでシアトルの寒い冬に凍えていたのが、信じられない。
プエルト・バイアルタの冬は、ベリングハムの夏よりも暑い！！

入国手続きは、あっけなかった。移民局（Immigration）では何も聞かれなかったし、税関（Custom）も素通りだった。
経済効果に貢献してくれる外国人は 誰でも大歓迎なのだろうと受け取った。

さて、まずは、メキシコの通貨が必要だと思い、空港でいくらか両替をすることにした。メキシコの通貨はペソだ。税関のある広い部屋に、両替所が2箇所見える。確認してみるとどちらも同じ会社ようだ。「手数料はとるのか？」とき

くと、「とらない」という。でも、「両替金額が多いほどレートが良くなる。100ドルよりも150ドルの方がレートがいい。」というので、とりあえずUS\$160ドルをメキシコのペソに両替することにした。換算レートはUS\$1ドル=11.005ペソとなっている。この時は、まあ、こんなもんだろうと、あまり気にせずに両替を終える。が、実は、これは、大失敗だった。前もって換算レートを下調べしておくべきだったと、後で、かなり悔しい思いをした。というのは、市内の銀行や両替所では、US\$1ドル=12.50ペソあたりのレートで両替ができたのだ。もちろん手数料もかからない。つまり、空港で両替した\$160ドルを、町で両替していれば、あと240ペソ（約US20ドル分）は余分に手に入っていたことになる。この違いは、かなり大きい。悔しいが、後悔先に立たずである。。。

それだけではない。私達には、さらに重大な情報が欠けていた。

実は、アメリカからの観光客が多いこの地域では、なんと、アメリカドルが普通に使えるのだ！つまり、空港であわてて両替をする必要など、全くなかったわけだ。町を歩いていると、露店からしつこいほど呼び込みの声がかかる。彼らはきまって、米ドルで価格を交渉してくるし、さらに、現地通貨のペソを使うよりも、米ドルで購入した方が割安に購入できることも多々あった。「ペソしか持っていない」というと、大抵はがっかりした様子になり、「ペソならこの金額だ」と、少し割高の現地金額を提示してくることが多かった。彼らは、どうやらアメリカドルの方が嬉しいようだ。

どれだけ米ドルが流通しているかをさらに実感したのは、大手スーパーのWalmart（ジャスコやダイエーのようなもの）へ立ち寄った時だった。店内には、USドルコーナーというセクションが設けてあり、このセクションに陳列している商品は全て米ドル価格が表示されている。

さらに、店頭においてある広告をのぞいてみると、ソニーのデジカメが\$120と書いてある。が、\$120ペソではあまりにも安すぎる。つまり、これはアメリカ\$120ドルということなのだ。かと思えば、このデジカメの隣には、バスタオルが\$80と書いてある。こちらはメキシコ80ペソということになる。ペソも記号は\$で表示される上に、同じページにアメリカドル価格とメキシコペソ価格がごちゃごちゃに混じっているのだ。初めは何がなんだか頭の中が混乱してしまっただが、きっと何かルールがあるはずだと思い、じっくり観察してみた。その結果、どうやら、赤のラベルで表示されている場合はアメリカドル価格、青のラベルで表示されている場合はメキシコペソ価格だと気がついた。

店の中をまわってみると、USドルコーナーだけに限らず、あちこちに、USドル価格表示が点在している。たとえば、タキーラの売り場で、\$350のボトルと\$17のボトルが隣同士にあたりするのだが、両方が米ドル表示とすれば、テキーラ1本US\$350ドルは高すぎるし、両方がペソ表示と考えるなら、テキーラ1本17ペソは安すぎる。つまり、この場合、\$350は350ペソで、\$17はUS17ドルと言うわけだ。

ともかく、地元スーパーのこの例でもわかるように、少なくともプエルト・バイアルタでは、アメリカドルが普通に流通している。

結論をいえば、プエルトバイアルタでは、空港で両替をしないこと、両替は市内の両替所や銀行ですること、そして、1ドル、5ドル、10ドルなどの細かいアメリカドル紙幣をたくさん用意しておくこと、何かと便利だということ。今回、失敗を通して学んだ貴重なレッスンだった。

ちなみに、アメリカと違って、メキシコではクレジットカードが使えない店も多いので、現金をいつも持ち歩く必要がある。日本も含め、多くの国では、これは当たり前のことかもしれないが、50円のガムを買うのにもクレジットカードを使うようなカード社会のアメリカでは、日常生活に現金を持ち歩く必要はほとんどない。カードに慣れてしまうと、現金を持ち歩くのがおっくうになるもので、実際、普段、私の財布の中には数ドル（数百円）ほどしか入っていない。

さらなるアメリカとの違いといえば、消費税の表示だ。アメリカでは、消費税前の価格が表示されているため、レジで支払う段階になって消費税込みの合計を提示され、「え、そんなに買った？」なんてことも多々ある。もっとややっこしいことに、アメリカでは、同じ州内でも町によって消費税が違う。そのため、同じ本を買うにしても、シアトルよりも、ベリングハムで購入した方が安い。しかし、メキシコでは、日本と同じく、すべて消費税込みの価格が表示されているので、計算がしやすい。

メキシコの貨幣

メキシコの通貨コインと通貨紙幣は、以下の写真のとおりだ。



1ペソは、約5.5円、US\$0.07ドルだ。

私の滞在中には、20ペソコイン、10ペソ紙幣と1000ペソ紙幣はお目にかからなかった。

メキシコの空港でのハプニング

さて、空港内での両替を終え、税関のある広い部屋を出ると、そこには、おびたしい数の、白い服に身を包んだ「メキシコ男性の軍団」が、乗客を待ち構えていた。私達に向かって、40歳くらいの白服の一人が、満面の笑をたたえながらさっそうと近づいてきたかと思うと、いきなり質問攻めにあった。「どこに滞在するのか」、「何をしたいのか」、「どれくらい滞在するのか」、「どこから来たのか」などなど、矢継ぎ早に質問しながら、左側の壁際にずらりとならんでいるカウンターの一つに誘導していく。そのカウンターの向こう側にも、隙間なく白い服の男性たちがひしめき合っている。いったい何事が起こっているのか全く理解できないまま、相手の勢いにおされてとりあえず質問に答える私達の目の前で、白服男性は、いきなりびらりと地図を広げ、今度は、懸命に、観光スポットや町の楽しみ方を説明し始めた。説明を聞きながら、彼のあまりにも熱心さに、多少の違和感と警戒心を覚えながらも、「なるほど、この白服の男性達は、観光案内の人達だったのか。」と思うことにした。「こんなにたくさんの観光案内人が空港に待機しているなんて、さすが有名な観光地だなあ。」と思い始めたのもつかの間、まもなく、彼らの正体が発覚する。

白服男性は、一通り、観光スポットやイベントなどを説明した後、私たちに、今回の旅行で何がしたいかと聞いてきた。私達はキャノピーツアー（Canopy Tour）に行こうと決めていたので、それを言うと、話の方向が単なる観光案内から、突如タイムシェアの勧誘へと動いた。

実は、この圧倒されるまでに陽気で強引といえる白服男性の軍団は、Paradise Village Resort のタイムシェア（Timeshare）の勧誘員だったのだ。

「タイムシェアの説明を90分間ほど聞くだけで、80ドルのキャノピーツアーのチケットに加え、30ドルのシティーツアー（City Tour）と、50ドルのBay クルーズツアーのチケットも、全て無料でプレゼントするが、どうだ？」と聞いてくる。「City Tourと、Bay クルーズツアーも、町のベストアトラクションに入っているのだから、これらのツアーにも是非参加すべきだ」と力説する。さらに、「タイムシェアの説明会では何も買う必要はないし、話を聞くだけでいい。美味しい朝食も無料でご馳走するし、ホテルの送迎もする。」と付け加えた。いきなりの勧誘と美味しい話に、半分疑いの目で顔を見合わせている私達にむかって、今度は、「あなたたちがこのタイムシェアの説明会に行ってくれば、自分は勧誘料を払ってもらえるので、自分を助けると思って参加して欲しい。」と泣き落としまではじめた。

彼の熱心さに押され、躊躇はあったものの、すこし冷静になって考えてみることにした。私達は、もともと現地についてからスケジュールを組む予定だったので、まだ何の予定も入れていない。それに、シティーツアーで、町を回りながらガイドさんから説明を聞けるというのは嬉しい提案だ。クルーズも楽しそうだ。せっかく来たのだから、海上で楽しむのもいい。なんといってもこれらのツアーチケットが全て無料で手に入るというのは大変魅力的だ。ちなみに、この類のセールスは、今回のようなタイムシェアも含め、アメリカで何度か経験済みなので、相手に飲まれない自信もある。それに、メキシコでタイムシェアのリゾートを見物するのも悪くない。こじつけて考えれば、メキシコ人のセールスの仕方を見ても、ひょっとすると面白いかもしれない。

友達と話し合った結果、彼らの誘いに乗ることにした。

ところが、白服の男性に「OK」の返事するやいなや、今度はいきなり、予約の保証金として、US100ドルくれと言ってきた。「は？」である。見知らぬ異国の地だ。とり逃げされてもおかしくない。「信用できない」、と疑いの目を向けると、白服男性は、「無料プレゼントのツアーチケットには、前もって予約を入れる必要があり、それをキャンセルされるとリゾート側も損をするから、保証金をとるのだ」と説明する。さらに、「この保証金は、当日、リゾート会場で全額を返すから、私達には一銭もかからない」、と一生懸命に説得しようとする。

疑いが完全に晴れたわけではないが、しばらく考えた後、空港で大々的に行なっている勧誘なら、不正な会社でもないだろうし、当日全額返って来るというなら、ま、いいか、との結論を出し、20ドル札を5枚、合計100ドルを差し出した。彼は嬉しそうに「受け取ったこの紙幣を当日そのままそっくり返すから。」と何度も繰り返しながら、私の手から紙幣を受け取った。

後々わかったことなのだが、白服男性の会話や説明の中には、かなりのうそがあった。まず、保証金を取る理由は、ツアーチケットの予約とは全く関係なく、私達にドタキャンされないための「人質」にしか過ぎなかったし、保証金は返ってきたには返ってきたが、私が渡した20ドル札5枚がそのまま返ってきたのではなく、リゾートオフィスの机の引き出しに保管してある100ドル紙幣1枚だった。

それにしても、この「保証金をとる」というのは、なるほどなあと、後でとても納得させられた。というのも、その後、行く先々で、何度も同じようなタイムシェアの勧誘を受けたからだ。もしこの「人質の保証金」がなければ、すっぴんかすもよし、キャンセルするもよし、どうにでも軽くあしらうことができた。こちらは単なる数日間限りの旅行客なのだし、予定が突然変わってもおかしくない。別の会社からの勧誘のほうが魅力的ならば、そちらの方へ予定変更するのも自由だ。ところが、この「人質の保証金」を払ってしまったがため、これを取り返したいならば、約束どおりプレゼンに行くしかないというわけだ。

別れ際に、白服の男性は、さらにおかしなことを言った。「そこのドアを出たところに、あなたたちのホテルからの送迎が来ているが、彼らに、われわれの誘いに乗ったことを絶対話さないように。」というのだ。「彼らも自分達のリゾートツアーを勧誘してコミッションをもらおうとねらっているから、もし、すでに我々の誘いにOKしたと知ったら、あなた方の損になるような行動をとるかもしれない。だから絶対に話さないように。」と何度も念を押す。さらに、彼は、「ホテルに着いても、このことは誰にも話さないように。ホテルはわれわれの競合相手で、ホテル側は自分たちの客を横取りされたと知って、あなた方の損になる対応をとるかもしれないから気をつけるように。明日、ホテルまで迎えに行くが、ホテルのロビーではなく、外で待っているから、外に出てきてくれ。」と付け加えた。

この忠告が何を意味していたのか、その時は知る由もなかった。

Paradise Village Resort の白服の男性からやっと開放され、ドアの外に出た。ホテルの送迎はどこにいるのかときよるきよる探してみると、「Apple Vacation」の看板を持った数人の男性の固まりを発見。つまり、ホテルの送迎は、Apple Vacation が手配した送迎だったというわけだ。彼らに近づくと、最初にいきなり聞いてきたのが、「ドアの中で、勧誘を受けなかったか?」だった。「わお、いきなりかあ、」と内心たじたじになりながら、もしここで「受けた」と認めればホテルまでの送迎を拒否されるかもとの不安から、白服の男性の忠告に素直に従い、「え？何の話？」と言葉をはぐらかした。しかし、相手も要領を得たもので、しつこく何度も繰り返し聞いてくる。しらを切り続けると、「わかった。明日ホテルのロビーに10時30分に会おう。その時に帰りの空港まで送るスケジュールの確認をする。もしその時間にロビーに来なければ、帰りは送らない。」という。これには困った。明日9時には、白服男性の一人がリゾートの説明会のため私達を迎えに来ることになっている。なので、「明日はすでに予定が入っていて、そんな中途半端な時間には会えない。別の日にしてほしい。」と言ったのだが、相手はがんとして「明日の10時30分」の一点張りなのだ。「そんなの納得できない」といくら言っても、動かない。

大体、わざわざ着いた翌日の朝10時30分にロビーまでやってきて、7日後の帰りの送迎スケジュールの確認をする必要など、絶対に無いはずだ。確認なら今すればいいわけだし、そうでなくても、明日の朝10時30分でなくてはならない理由が見つからない。つまり、彼らは、私達が Paradise Village Resort につかまったに違いないと確信したうえで、それを阻害して彼らの勧誘を受けさせようという魂胆に違いないと思わざるを得なかった。かなり強引だ。先ほど払った100ドルの保証金が脳裏をかすめる。この人質の保証金のために Paradise Village Resort をすっぴんかすわけにもいかないし、どうしようと迷ったが、でも、よくよく考えると、すでにツアーを3つも無料でゲットしてかなり得をしているので、帰りはタクシーでもいいや、と開き直り、ひとまずここは、「OK、分かった。」と了解したふりをして、ホテルまで送ってもらうことにした。

ハシエンダホテル（Hacienda Hotel and Spa）に到着

メキシコについていきなり台風に巻き込まれたような気分だったが、なんとか無事（？）ホテルまでたどり着けた。

この度の旅行パックは、格安パックだったため、ホテルにはそれほど期待していなかったのだが、着いてみると、広々としたメキシコ風のおしゃれなロビーがとっても素敵だ。感動した。



ホテルのロビー



ホテルのロビー

早速チェックイン。

カウンターでは、病院に入院する時につけられるような赤いビニールのブレスレットをはめられた。滞在中は、ずっとはめているようにと言われる。どうやら、ホテルの客かどうかをこのブレスレットで見分けるようだ。

Wi-Fi も無料で使えるという。ありがたい。

チェックインが終わると、ボーイが、私達のスーツケースを運びながら部屋まで案内してくれた。しゃれた通路と中庭を通り抜け、プールの横を通りすぎた先にある、メキシコ風の建物の2階の一室だ。

部屋にはいって、さらに感動！ とてもメキシコっぽい、かなり広々としたお部屋だ。



宿泊した部屋

部屋のバルコニーからは、庭のプールと中庭が見渡せて、眺めも素敵だ。



バルコニーからの眺め



バルコニーからの眺め

ひとしきりの感動の後、ベッドに腰かけ、受付で渡された「ホテルの使用に関する説明書」をのんびり読み始めた。

と。。なんと、すごいことが書いてある。鍵を紛失すれば150ドル（約11,500円）、タオルを部屋から持ち出したり紛失すれば100ドル（約7,700円）、病院風ブレスレットを紛失すれば50ドル（約3,800円）、みたいな、目を疑いたくなるような価格と内容だ。だいたい、この赤いブレスレットは、実質10円もかからないだろうただのビニールだ。それが\$50ドル??

この国は、すべてにお金をチャージするようだ。

なくさないように気をつけねば。。。

飛行機内では、食事をとらなかったもので、ホテルについたころにはかなりお腹がすいていたのだが、友達はアメリカでやり残してきていた気になることがあったので、早速コンピュータをネットにつないで作業し始めた。あっという間に時間が経過、気付くと外はすでに暗くなっていた。「このままだと夕食が遅くなりすぎるから、ひとまず食べに行こうよお」、と友達を誘い、私達は部屋出た。

ロビーに行くと、入り口近くに観光案内デスクがあり、30代くらいの気さくそうな男性が座っている。早速、どこかお勧めのレストランが近くに無いか聞いてみた。

私達が今日到着したばかりだと知った彼は、いろいろと丁寧に教えてくれた。

まずはチェックインの時につけられた赤いブレスレット。予想通り、これはホテルの客かどうかを見分けるための物らしいのだが、同時に、このブレスレットの色にも意味があることがわかった。私達がつけている赤いブレスレットは宿泊のみの客であることを示していて、青いブレスレットは食事込みの宿泊客ということらしい。「\$50ドル払えば、食

食事プランに変更できるが、どうだ？」と聞いてくる。50ドルとはこれまた安い。朝、昼、晩とすべてbuffet形式で食べ放題。2-3食もすれば、もとがとれそうだ。しかし、やはりホテルで食事をする気にはならないので、「No」と答えた。すると、彼が驚くことを言った。このホテルには、どうやら同じ系列のホテルが、海岸沿いに4件ほどあるらしいのだが、その1件が、私達のホテルとは逆の色のブレスレットを使っているのだという。つまり、赤のブレスレットをつけている私達なら、そのホテルへ行けば、ただで食事が食べれるよ、と親切に教えてくれたのだ。私達が迷わないようにと、地図を見ながら、そのホテルの場所にするしまでつけてくれた。その後、「僕が教えたとは、誰にも言わないでね」と、さわやかな笑顔で付け加えた。アメリカや日本では見つかると「首」になりそうなアドバイスを客に与えても平気な国、と素直に受け取っていいのだろうか？ なんておおらかな国なんだろう。。。

さて、お気づきだろうか、ここで、更なるレッスンを学んだことになる。アメリカのApple Vacationsでは、食事付プランは100ドル追加だったはずだ。ところが、現地では50ドル。つまり、食事付のパッケージが欲しければ、アメリカではとらえず宿泊のみの安いプランを購入しておき、現地で食事込みプランに変更した方が安くつくということになる。食事はbuffet形式なので、一人増えても作る量は大きく変わらないし、少しでも目先の現金を手に入れよう、といったところなのだろうか。やはり、メキシコは、うわさ通り、アバウトな国のようだ。

このハシエンダホテル (Hacienda Hotel and Spa) は、ソリアナ (Soriana Super) という名の食料品スーパー をはさんでクルーズ船が泊まるマリーナのお隣にある。市バスの停留所は、このお隣のスーパーの前。Walmartも徒歩5分ほどの距離で、非常に便利なおところだった。

初めて Pueruta Viallta の町に出る

AAAでもらったガイドブックには、市バスは夜11時ごろまで走っているとある。外はすでに暗く、安全性に少し不安があるものの、思い切って、夕食は、市バスに乗って町のレストランまで出かけることにした。

海岸線のメインロードで見かけるバスには、青いバスと緑のバスがある。青いバスは海岸線ルートを走り、緑のバスは内陸ルートを走るらしい。バスのフロントガラスと横の窓に、走るルートの主要な停留所の名前が手書きで殴り書きしてある。私達のホテルは Walmart の近くなので、「Walmart」と「Downtown」が書いてあるバスに乗れば確実にホテルと町の間を往復できる。バスは5分おきくらいに来る。たまに 2台続けてくることもあり、めちゃくちゃいい加減なスケジュールのようだ。バスは、お世辞にもきれいとは言えない。というか、かなりぼろい。つくりは50年くらい前のスタイルを思わせるシンプルなつくりで、サスペンションがないのではと思えるくらい大きく上下にがたがたゆれながら、鉄のきしむような大きな音を立てて走る。



市バスの運転席



市バスの中

メキシコの道路には、石畳が多い。この石畳の道路に車線は無いのだが、暗黙の了解で2車線になっているらしく、この大きなバスが、狭い道路を猛スピードで車線変更(?)を起用に繰り返しながら走る。バス停の近くにくると、止まる数秒前には搭乗口のドアが開く。止まると同時に人が乗り降りし最後の人が乗ったとみるや、搭乗口のドアを開けたままの状態走り出す。非常に効率的なやり方だとは思いますが、万が一の事故を恐れる日本やアメリカでは、このようにドアを開けたまま走るといふのはありえない。乗車料金は 6.50ペソ(約36円)。乗車時に料金を運転手に手渡しする。運転手はおつりと薄っぺらい紙の乗車券を手渡ししてくれる。子供と年寄りは無料のようだ。回数券や定期券のようなものを使っている人は見かけなかった。それなるものが存在するのかわからない。運転席の前には、大きな木作りの箱が置いてあり、そこにコインが種類ごとにならべてある。客から受け取ったコインはそこへ置き、おつりもそこから払う。運転手は、信号待ちの時などに、時々木箱の中のコインの整理をする。AAAのガイドブックによると、「バスの乗車にお札を出すと嫌がられる」と書いてあったので、バスに乗る時は、いつも細かいコインを用意しておくようにした。でも、たまに客が紙幣で払う場面も見かけた。運転手は、受け取った紙幣を輪ゴムでまとめ、胸元にしまう。大切な物は身につけておくというのが基本のようだ。



石畳の多い町

市バスで特に唖然としたのは、乗客を乗せたまま、突然、町のガソリンスタンドに立ち寄ってガソリンを入れ始めたことだ。ガソリンスタンドは、セルフサービスだ。運転手は、あたりまえのことに、バスを降りてガソリンを入れる。一日中バスを走らせ続けていれば、もちろんいつかはガソリンタンクが空になる。そのつど、客を乗せたままガソリンスタンドで燃料を補給するというのが、どうやらメキシカンスタイルのようだ。

メキシコのガソリンは高いらしい。後に参加したCity Tourのバスガイドさんの話によると、ガソリンは1L 4ドルだという。アメリカの4倍の値段だ。なので、裕福な人しか車を持ってないし、車を持っていても、公共交通手段、つまりバスを利用することが多いらしい。

この夜、私達は、レストランを探すべく、ダウンタウンに入ったところでバスを降りた。薄暗い夜のダウンタウンを、しばらくぶらぶらと歩き回ったが、これといって目を引くレストランがない。こういう時は地元の人に聞いてみるのが手っ取り早いと思い、その辺りを歩いているメキシコ人に、「どこか美味しいメキシカンレストランはないか」と声をかけてみた。彼女は、1-2ブロックほど先にあるピピス (Pipis) というメキシカンレストランを勧めてくれた。

メキシコでの初めての夕食



通りがかりのメキシコ人が勧めてくれたピピス (Pipis) レストランに入ってみると、4-5人の男達が、客のテーブルの一つを囲んで、ギターなどの楽器を引きながら、陽気なスペイン語の歌を大声で歌ってにぎわっていた。メキシカンレストランでは良く見られる光景だが、普通、このようにレストランで歌を歌う男性達は、レストランに雇われているわけではない。彼らは、フリーのエンターテイナーで、いろいろな店を回りながら、チップをくれそうな客の座っているテーブルを囲って音楽を奏で、そこにいる客からのチップを収入としている。チップを払いたくなければ、テーブルを囲って演奏を始めようとした時に、「No, No, 」と言え、別のテーブルへ移ってくれる。向こうから「ミュージック？」とあらかじめ聞いてくる場合もあるので、この時も、チップを払いたくなければ「NO」と答えるべきだ。一度だけだが、レストランではなく、満員バスの中でいきなりギターを演奏・歌いだした二人組みの男性に出くわし、さすがに、「え？こんなところで歌うの？」と驚いた。歌い終わった後で、スペイン語でなにやらアナウンスしていたが、彼らにチップを払った乗客はいなかったように思う。ちょっと気の毒に思った。

ピピスレストランを見渡すと、入っている客は西洋人ばかりでメキシコ人は見当たらなかったが、満席で、非常に繁盛していた。とにかく腹ペコだ。私たちは案内された席に座り、早速渡されたメニューを見る。何を注文しようかと迷っている私達に、ウェーターが「お飲み物は？」と尋ねてくる。メキシコといえば、タキーラの入ったマーガリタだ。周りのテーブルでも、ほとんどの客が大グラスに入ったマーガリタを楽しんでいる。私達も、ストロベリー味とマンゴ味のマーガリタをオーダーした。やってきたマーガリタは、さすが本場、とっても美味しかった。メインコースは、何を注文しようかと迷ったが、周りの客が食べている料理やメニューを見る限り、どうやらこのレストランはファヒタ (Fajita) が有名のようなので、私達も、ファヒタの包みであるブリト (Brito) を一つと、エンチラダ (Enchilada) とタコ (Taco) のコンボセットを一つオーダーして、二人で分けて食べることにした。

メキシコのレストランでは、食べ放題のチップとサルサがついてくるのが一般的だ。これは、アメリカにあるメキシカンレストランでも同じだ。ピピスでも、サルサとチップがテーブルの上に置かれた。腹ペコの私達は、オーダーした食

事が来るのが待ちきれず、マーガリタを飲みながら、サルサとチップを食べ始めた。するとまもなく、野菜などのいろいろな材料を乗せた大きなお盆を持った男性が、私達のテーブルにやってきた。何をやるのだろう、と見ていると、目の前でアボカドをスプーンでくりだし、グアカマラを作り始めた。



目の前で、グアカマラを作ってくれる。
見え隠れしているドル札、ペソ札は、客からのチップ

その見事な手さばきに見ほれているうちに、グアカマラがあっという間に完成した。彼は、グアカマラを私達のテーブルの上に置くと、静かに去っていった。この手作りグアカマラがなんとも美味しい！サルサとグアカマラをチップに乗せて食べると、感動の味だ。私達は、ものすごい勢いで、チップとグアカマラを食べほした。

そして、お腹が落ち着いてきたところに、やっと、注文した食事が運ばれてきた。



右がブリト、左がタコとエンチラダのコンボセット。
食事の写真を撮ろうとカメラを構えたところ、ウェイターがいきなりブリトにナイフを突き刺して、「さあ、撮れ」と笑っている。
ジョーク好きなのはお国柄のようだ。

チップとグアカマラでかなりお腹が満足してしまっていた私達は、運ばれてきた料理の量を見ながら、一品だけ頼んで、二人で半分にするればよかったと後悔した。が、もう遅い。とにかく食べ始める。期待したお味の方は、残念ながら、アメリカで食べるメキシコ料理のそれとほとんど変わららず、ちょっとがっかりした。二人でかなり頑張ってはみたものの、ついに食べ切ることができなかった。この店の客は、ほとんどがアメリカ人、カナダ人なので、料理の味もそれに合わせてあるのではと思ってしまった。結局このレストランで一番感動したのは、無料サービスのグアカマラとサルサ、そして、マーガリタの美味しさだった。

気になるところのお勘定は、一人辺り233ペソ（1330円、US\$17ドル）。大量の料理とお〜きなグラスのマーガリタでこの値段は、アメリカの相場よりかなり安いといえる。

お腹も満足し、レストランを出たころには、すでに9時半をまわっていた。この時間、町の中は、まだ結構人が出歩いている、それほど危険でもなさそうだ。ダウントウンからホテルまではバスで10分ほど。

ホテル横のバス停で降り、目の前のスーパーで、水と明日の朝食用のパンとジュースを購入し、ホテルの部屋に着いたころには、夜の10時を過ぎていた。

あとがき

メキシコ、プエルト・バイアルタでの1日目は、なかなか刺激ある一日でした。

第二巻（Vol.2）は、2日目の、パラダイス・リゾートでのセールスマンとの戦い（？）からスタートします。

滞在中には、他にも思いがけないハプニングが。。。

人のいい「日本人」の私達は、まんまと、だまされてしまいました（涙）。

さらに、お得情報として、外国で手数料のかからない無料のクレジットカードや、キャッシュカード（ATMカード）などについてもお知らせしています。あ、ただし、これらはアメリカの銀行発行なので、アメリカ在住の方に限られるかもしれません。

写真もたくさん取り入れました。

ということで、第二巻も、お楽しみください！